質問

かぶき者や「戦国の遺風」について かぶき者や「戦国の遺風」について、生類憐み令・服忌令との関連もあわせて、具体的に教えてください。

〔回答者〕高埜 利彦

このテーマは、江戸時代前半のことではあるが、参考のために、まず昭和二十年（一九四五）八月十五日以後の、日本のいわゆる戦後社会に思いをめぐらして欲しい。長い戦争態勢が終わり、人々には心の底からの解放感が溢れかえった。物資が不足するなか闇市には、活気がみなぎっていた。男も女も生活物資を求めて闇市を歩いたが、その中には帰還兵が軍服のまま歩く姿も見出される。これは戦後の記録フィルムから窺えることだが、帰還兵たちはどんな思いを持って戦後社会で生きていたのであろうか。戦地に赴き、戦場で生命を賭して闘った後、敗戦を味わい、何とか日本の地に帰ってこられ、その後どんな生き方が待ち受けていたのか。中には特攻隊の生き残りもいた。一度は命を捨てる覚悟であった者が、平和な社会にどのように対応して生きていけばよかったのか。石川達三の小説『風にそよぐ葦』は、帰還兵を含む戦後社会をリアルに描き、その当時

の様相を想像させてくれる。

戦国時代をいつからとするか、ひとまず応仁元年（一四六七）の応仁の乱から始まると見るとして、織田信長の権力樹立まで一〇〇年余り、さらに天下統一のための戦いは続き、元和元年（一六一五）の大坂の陣まで平和は訪れなかった。こうしてみるとおよそ一五〇年間戦乱が続き、農民・職人・商人やその家族などの庶民は、厳しい不安な生活を余儀なくされた。庶民とは異なり、侍や足軽たちは主人の命令に従い命を賭して戦場に赴き、敵の将兵と戦い、武功をあげれば恩賞に預かり、上昇していった。下剋上の世の中では、力あるものが生き残る。

長かった戦争状態がひとまず止む中で、かぶき者が登場した。かぶき者とは「かぶく者」という意味で、「かぶく」は「傾く」（かたぶく）と同義で、まっすぐなものが一方に斜めになることである。この場合、異形・異装いさまようあるいは通常と異なる行動をとることを指している。そのいでたちは、ピロードの襟のある着物を着、大髭をつくり、長い太刀や大脇差を差して遊び歩く。あるいは長キセルを使って、当時禁じられていた煙草を喫する（巻頭図版・上）といった具合であった。

慶長十七年（一六一二）江戸において、旗本の奉公人に罪があったとして、主人である大番頭おおばんがしら芝山権左衛門正次がこの奉公人を殺したところ、別の奉公人が主人の行為は理不尽である

として、主人を殺害して逃亡した事件が発生した。捕らえられた奉公人は、かぶき者で、大鳥居逸兵衛を首領とする逸兵衛組の一統であった。大鳥居逸兵衛は、国奉行大久保長安から侍に取り立てられたことがあるが、暇を取り牢人となっていた。

弓・槍・鉄砲などに通じ、体軀・風貌たくましく、かぶき者のリーダーとして、若者を集めて血判の起請文を取り交わし、強い結束力を誇っていた。主人殺しの奉公人であるかぶき者は、「われわれは日ごろ約束を結んでいて、たとえ主人であっても理不尽のことがあつたら仇をうとうと連署して党を結んでい」というのである。首領の大鳥居逸兵衛も捕らえられ、江戸市中引き廻しのおえ礫にかけられた。この時、三〇〇人におよぶ一統のかぶき者たちも成敗されたと『徳川実紀』に記される。江戸に限らず駿府・京都・大坂・堺などでもかぶき者が横行していたが、初期のかぶき者は、道理を重んじ、道理に反する場合には、主人を主人とも思わず、組や党を結んだ同士・仲間との横のつながりを重んじる行動をとった。上下の主従関係によって武家権力の秩序を形成しようとする考え方は、真つ向対立するかぶき者の「党を結ぶ」行為は厳しく弾圧され、これは江戸時代を通しての原則となった。

四代將軍徳川家綱政権下では、明清交替も終わり、国内外の平和と安定は不動のものとなっていた。寛文三年（一六六三）

「武家諸法度」に追加する形で、「殉死の禁止」が命じられた。

平和な時代の武士の奉公のあり方は、従来の主人個人に命を捧げ、主人の死後は追腹を切るというものではなく、主人の家に代々奉公することが義務付けられた。もはや下剋上の世の中は終わり、主人の家は代々主人であり続けることになる。徳川の家臣で譜代大名になることができなかつた旗本・御家人や牢人たちは、もはや戦場で武功を上げて上昇を図る道は途絶え、武に頼る武頼とも、礼の無い無礼ともに通じる無頼のかぶき者となつて、固定した身分制度の中で、過去の激動の時代の価値観（戦国の遺風）を転換できず、そのために秩序に抗して乱暴を働き、満たされぬ思いを社会にぶつけて解消しようとした。その旗本たち（旗本奴）の風は町人にも及び（町奴）、無頼の及ぼす影響は幕府の支配にとつて容認できないものとなつた。

旗本水野十郎左衛門は、大小神祇組と呼ばれたかぶき者の集団の頭目であつた。三〇〇〇石の大身旗本水野による無頼行為に対し、幕府は水野を評定所に呼び出すことになつた。身分・階層（家格）の序列は、装束によって一目瞭然にするため、服制で厳密に規制されていた。呼び出された水野は髪を結ばず解き乱れた被髪で、袴を着けぬまま、異形の風体で出頭した。

寛文四年（一六六四）三月、幕府は不作法の至りとして水野十郎左衛門を切腹させた。戦闘武功によって上昇することのでき

ない旗本・御家人は、身動きの取れない閉塞感の中で、異様な服装や辻斬りという残虐行為のほかに、慶安元年（二六四八）五月に「衆道の儀に付、無体なることを申しかけ、若衆くるい仕るまじき事」（『御触書寛保集成』）と触れられているような「若衆くるい」や、人の嫌がる乱暴行為、桜の枝を折る程度にとどまらず、人の飼犬を切り殺したり、犬食いをしたりするなどという行動を取った。つまり利根的な形で社会秩序に抵抗するという性格を持つのがこの時期のかぶき者で、初期のかぶき者のような主従制に対抗しうる、党や組による横の連帯を持った躍動的なものではなかった。

幕府は社会秩序・身分秩序を保つために、これらかぶき者を取り締まった。四代将軍家綱政権では慶安四年（一六五一）から六年間にわたってかぶき者の検挙を行なっているが、さらに五代将軍綱吉政権になると、天和二年（一六八二）の暮から翌年正月にかけて江戸で放火が続いたことから、かぶき者の検挙を強引に進めた。貞享三年（二六八六）九月二十七日には、江戸小石川で催された勤進能で騒ぎを起こしたのをきっかけに、大小神祇組の者など二百余名を逮捕した。その中には与力・同心や御家人の子弟が多数含まれ、リーダー格の一人は打ち首にされた。綱吉政権では、政権の始まりから二〇年余りに、合わせて三〇〇件にのぼる幕臣の処罰が繰り返され、そのうち、

かぶき者とみなせる素行不良や勤務不良、争い事が処罰理由の過半を占めた。以上は、かぶき者に対する、綱吉政権の力の弾圧であった。

これに加えて綱吉政権は、生類憐み令と服忌令を出し続けて、社会の価値観を一八〇度転換させた。貞享四年（二六八七）から二二年間にわたって、犬に限らず、生類全般の殺生や虐待を禁じた種々の法令が出され続けた。生類の中には人間も含まれ、捨て子・捨て病人の禁制や行き倒れ人の保護も命じられた。また、近親者に死者が出た時に、服喪と忌引きの日数を事細かに規定した服忌令は、貞享元年（一六八四）に発布された後、貞享三年、元禄元年（二六八八）、同四年、同五年、同六年にも追加補充がなされた。綱吉政権の徹底ぶりが窺える服忌令と生類憐み令によって、死や血を穢れたものとして排除する考え方や、生類を殺生してはならないという、この二つの価値観が二十数年間にわたり法令で徹底されたことで、社会の価値観は変わった。

かぶき者たちの、武に頼って血を流し死を恐れずに上昇を図ろうとする、戦国時代以来存続し、武士の世界に残ってきた論理は、社会の価値観の変化、すなわち服忌令による死や血を嫌う考え方の浸透とともに消えていかざるをえなかった。また生類を憐れむ政策が浸透したことで、それまでかぶき者がよその

飼い犬を殺したり、犬食いをおこなったような無頼行為を、かぶき者の存在とともに最終的に終わらせた。綱吉政権による生類憐みと服忌の考え方は、服忌令が江戸時代を通して生き続け、生類憐み令は法令としては六代將軍家宣政権で止むがその考え方は生き続けた。そこから今日まで、社会の価値観や心性^{しんせい}となってきたが、それに伴う功罪が存在してきたことに注意を向ける必要がある。その功罪とは何か、各種の差別の問題を軸に、考えてみて欲しい。

昭和二十年（一九四五）八月十五日の敗戦後、人びとは戦争が終わった解放感とともに、二度と戦争をしたくない、という平和の思いを強く持った。アメリカ軍による、三月十日の東京大空襲や地方都市の爆撃、八月六日の広島、九日の長崎への原子爆弾投下を受けて、戦争反対の思いと反核の精神は誰の心にも浸透したであろう。それから七五年、戦争を体験した人が少なくなり、世代が交代する中で、社会の価値観・心性はどのように変容したのだろうか、あわせて考えてみて欲しい。

参考文献

- 北島正元「かぶき者——その行動と論理」〔『近世史の群像』吉川弘文館、一九七七年〕
- 高埜利彦「一八世紀前半の日本——泰平のなかの転換」〔『岩波講座 日本通史 第13巻 近世3』岩波書店、一九九四年〕

高埜利彦『シリーズ日本近世史③ 天下泰平の時代』（岩波新書、二〇一五年）

（たかの・としひこ／学習院大学名誉教授）